

ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の研究（1）

— 『著作集』（1994）の分析による基本的視座の形成 —

岩間伸之

A Study on the Schwartz' Theory in Social Work(1): The Formation of the Basic Perspectives for Understanding by Analyzing of the Collected Writings

NOBUYUKI IWAMA

1. 本稿の目的と研究方法

本稿の目的は、1994年にアメリカで出版されたウィリアム・シュワルツ(William Schwartz)の著作集である『ソーシャルワーク—ウィリアム・シュワルツの著作集—』¹⁾（以下、『著作集』とする）を素材として、彼のソーシャルワーク理論を理解するための視座を提示することにある。したがって、シュワルツのソーシャルワーク理論の内容そのものに焦点を当てて考察するのではなく、そのための視座を『著作集』の客観的な分析によって明らかにしようとするものである。

シュワルツのソーシャルワーク理論は歴史性、哲学性、思想性を内包しており、その根源にまで遡ってそこから立体的に再構成することは容易ではない。筆者は、これまでにシュワルツのソーシャルワーク理論の理解を深めるために、「相互援助システム」(mutual aid system)や「媒介機能」(mediating function)等、彼の理論の特質に焦点を当てた研究を進めてきた²⁾。また、最近の論文ではシュワルツ理論を基礎的部分としてそこから進化させた「媒介・過程モデル」を提示して新しい展開を試みている³⁾。それらによって一定の基本的理解を進め、また新たな展開へ向けて踏み出したといえる。しかしながら、今後シュワルツ理論をさらに深く理解し、それを基盤に新たな展開を積み重ねるためにはその土台をより強固なものにする必要がある。新しい理論やモデルの構築に向けては、創造的で独自性の高い論理展開に加えて、立脚する基礎理論の深い理解と洞察が求められる。本稿ではシュワルツ理論の基礎研究の一つの方法として、『著作集』の分析によって理解のための視座を導き出し、シュワルツ理論の全体的考察へと今後展開していきたい。この『著作集』を分析するための研究方法として、3

つのアプローチを用いた。第1のアプローチは、シュワルツの経歴と照らし合わせながら、シュワルツの論文の年代別変遷を分析することである。第2のアプローチは、所収されているシュワルツ論文のカテゴリーごとの検討である。これを脚注の分析と併せて概観する。第3のアプローチはシュワルツ論文の脚注に記載されている引用・参考文献の分析である。これによってシュワルツに影響を与えた人物の傾向が浮き彫りになる。

本稿の構成としては、まず『著作集』の構成と意義についてまとめた上で、上記の3つの方法によって分析を試み、それを踏まえてシュワルツ理論を理解するための5つの視座を提示することにする。

2. 『著作集』の構成と意義

シュワルツの『著作集』は、トビー・バーマン・ロッシ(Toby Berman-Rossi)の編纂によって1994年に出版された。これは1982年にシュワルツが死去してから、12年が経過した時点でのことであった。著作集を出版するという構想はシュワルツ自身が生前から持っていたものである。彼が考えていた著作集のタイトルは、シュワルツの最後の論文のタイトルでもある「グループワークの伝統とソーシャルワーク実践」(The Group Work Tradition and Social Work Practice)であったという⁴⁾。

本書は、769ページに及ぶ大著である。『著作集』の巻末に掲載されている著作目録によれば、シュワルツの著作は未公開の文献も含めて全部で40編である。そのうちの27編がこの『著作集』に所収され、うち3編がこれまで未公開であった文献である。『著作集』の構成及び各々の部分の占める割合について表1で示した。

本書は、大きく分けて2つの部分から構成されている。

表1 『著作集』の全体構成

構 成	割 合 (%)
Foreword /Preface /Overview	-
Social Work with Groups:The Search for a Method (1968-1972)	25.2
Collected Works	
Part1:History and Tradition (4)	7.3
Part2:Group Work Theory (6)	12.5
Part3:The Field of Social Work (5)	8.8
Part4:The Setting of Practice (6)	20.3
Part5:The Art of Teaching (2)	3.9
Part6:Research (3)	20.3
Epilogue	0.5
Appendices	1.2

注：Collected Works の Part1-6 のカッコ内の数字は掲載著作数を示す。

一つは、シュワルツのグループワーク論の内容を体系的にまとめた“Social Work with Groups:The Search for a Method(1968-1972)”である。これは全体の約4分の1を占めている。この著作は1968年から1972年の間にシュワルツがそれまでの論文をもとに自分の理論を一冊にまとめようとしたものである。しかしながら、11章から構成されるこの大部な著作のうち、最後の1章を未完のまま残してシュワルツが死去してしまっていた。そこで『著作集』の発刊にあたって、バーマン・ロッシが中心となって他のシュワルツの文献をもとに最終章をまとめ、また引用・参考文献を整理してこの『著作集』への掲載に至ったものである⁹⁾。この著作が公刊されることになったことは、シュワルツのソーシャルワーク論研究においても極めて有意義なことであるし、またこの著作を出版できなかったことに悔いのあったシュワルツ自身にとっても、遅ればせながら初志を貫徹したといえよう。

一方、残りの4分の3を占めているのがシュワルツの論文を集めた論集(Collected Works)である。ここには、前述の文献を除く26編が6つのパートにそれぞれ2編から6編に分類されて収められている。Part4とPart6が全体の約2割ずつを占め、Part2が12.5%を占めている。この6つの分類は、シュワルツ自身による構想が下地となっている。シュワルツによる原案では、自分の著作を年代別ではなくテーマ別に7つに分類していた。その分類とは表1のPart1からPart6の6つのカテゴリーに「書評と短編」(Reviews and Short Pieces)を加えたものであった。『著作集』の発刊にあたってはこの最後の「書評と短編」が主要論文を優先するために割愛され、結果的に6つのカテゴリーから構成されることになった。

なお、1971年と1977年に*Encyclopedia of Social Work*(16th,17th)に掲載された論文⁸⁾はシュワルツ理論のエッセンスともいえる洗練された文献であるが、転載

の許可が得られなかったためにこの『著作集』には含まれていない。ただし、その内容は掲載されている文献と多く重複しているものである。掲載されていない残りの13編の内訳は、この2編に加えてシュワルツらによって編集された*The Practice of Group Work*⁹⁾(シュワルツが執筆した部分については掲載されている)、それと「書評と短編」に本来含まれる内容の文献である。

以上のような構成からなるこの『著作集』は、未公開の文献を含んだシュワルツの主要論文のすべてが収められている。したがって言うまでもなく、シュワルツのソーシャルワーク論研究においては第一級の資料である。シュワルツが残した研究業績は決して多いとはいえないが、彼の研究がソーシャルワークに与えた影響の大きさは計り知れない。シュワルツの理論を継承するギッターマン(Gitterman A.)とシュルマン(Shulman L.)は、本書のはしがきの中で、シュワルツ理論について「彼の概念化は、伝統的定式を打ち破り、新しい方向性を示し、発見を促すパラダイムを構築し、専門的な実践とソーシャルワーク教育の両方に重要な貢献をなした¹⁰⁾と評価している。そして同じくギッターマンらによると、シュワルツは研究業績をふくらますことに関心を示さなかったが、「彼は出版に向けての2つの簡潔な基準を持っていた。それは自分の研究が新たなものを生み出す概念(a generative idea)を提供しなければならないことと、それを正確に表現しなければならないことであった¹¹⁾としていた。シュワルツはまさにその通りの業績を残したといえる。

第一級の資料集としてシュワルツの研究業績がまとめられたこと自体、価値のあることであるが、ソーシャルワーク理論の視点からはその意義について3つの点から指摘できる。第1は歴史的評価の視点である。この出版はシュワルツの功績に対して一定の評価を付与する契機

となるものであろうが、今後もソーシャルワークの理論史上におけるシュワルツ理論の位置の明確化と評価について議論されなければならない。本書はその前提となるものである。第2には理論の継承性である。シュワルツの理論は単なる「過去の優れた遺物」ではなく現代のソーシャルワーク実践においても十分な有用性をもつ。それゆえに本書は理論を次代へつなぐ架け橋となる。第3は理論の発展性である。シュワルツ理論の特性の一つは、柔軟性と包括性をもつ発展可能性にある。現代の研究者が原著論文にまとめて触れる機会を提供できたことは、新たな理論的展開を生み出す土壌をつくることになる。

この『著作集』の書評を執筆したガーヴィン(Garvin, C.)が、「結果として、評者はソーシャルワーク専門職、ソーシャルワーク実践(特にグループワーク実践)、ソーシャルワーク教育、ソーシャルワーク・リサーチの研究に専心した長くて生産的な人生の成果へのコメントを求められる¹⁰⁾と述べているように、本書はまさにウィリアム・シュワルツの「遺産」であり、「人生」そのものといえよう。

3. シュワルツの略歴と研究業績の系譜

ここではシュワルツ理論を理解するための基本情報となる彼の略歴とそれと照らし合わせる形で研究業績の系譜について概観する。

シュワルツの略歴を表2で示した。シュワルツは、1916年にニューヨーク市で生まれ、育った。1939年にブルックリン大学(Brooklyn College)を卒業後、YMHA

のコミュニティセンターのユースディレクターやユダヤ人のコミュニティセンターのディレクターをしていた。その後いくつかの近隣センターのディレクターを歴任した。また夏期にはYMHA等のキャンププログラムのディレクターとしても活動していた。その間の1945年から1947年までコロンビア大学でソーシャルワークを学び、1948年には修士号を取得している。著作目録によると修士論文のタイトルは、“Action Research in a Group Work Setting: A Record of a Cooperative experience”であった。この時期にソーシャルワークの各種団体に勤務し、そこでグループワークやソーシャルワークの実践を積み重ねたことは、シュワルツに個人や社会における小集団の意義について気づかせることになり、後に独自の理論を導き出す源となった。

その後、オハイオ州立大学、イリノイ大学、コロンビア大学、フォードム大学で研究と教育を続けた。また、オハイオ州立大学とイリノイ大学に勤務している間にコロンビア大学の博士課程の学生として学び、1961年には博士号を取得している。その論文名は、“Content and Process in the Educative Experience”であった。

さて、表3ではシュワルツの研究業績を年代順に整理した。アルファベット一つが著作1編に相当する。アルファベットは表の注で示したように本書での分類を示しており、所収されていない文献については筆者の判断によった。これをみると、40編のうち37編が1959年以降の23年間に執筆されていることが分かる。またそのうち24編がコロンビア大学に在職中の1962年から1977年の間に

表2 ウィリアム・シュワルツの略歴

William Schwartz, 1916-1982	
1916	New York City に生まれる
1938-1957(summertime)	Summer Camping Programs(YMHA etc.)
1939	Brooklyn College 卒業
1943-1944	YMHA Community Center (Massachusetts)
1944-1945	Jewish Community Center (Connecticut)
1945-1947	Columbia University (master student)
1946-1947	Horace Mann-Lincoln Neighborhood Center
1948	修士号取得 (Columbia University)
1950-1955	Ohio State University
1953-1960	Columbia University (doctoral student)
1961	博士号取得 (Columbia University)
1955-1962	the University of Illinois
1962-1977	Columbia University
1977-1982	Fordham University (visiting professor)

資料1) *Encyclopedia of Social Work*, 18th, NASW, 1987, pp. 939-940.

資料2) Toby Berman-Rossi (ed.), *Social Work: The Collected Writings of William Schwartz*, F. E. Peacock Publishers, Inc., 1994, Overview.

注) 1947年以前の勤務先については勤務年が明らかなもののみ掲載した。

表3 年代別にみたシュワルツの研究業績

年代	著作の内容(発表数)	年代	著作の内容(発表数)
1948	G (1)	1965	- -
1949	- -	1966	O R F (3)
1950	- -	1967	O (1)
1951	R (1)	1968	S G (2)
1952	- -	1969	F S (2)
1953	- -	1970	- -
1954	- -	1971	S G G R G (5)
1955	O (1)	1972	- -
1956	- -	1973	F (1)
1957	- -	1974	- -
1958	- -	1975	- -
1959	H O (2)	1976	G (1)
1960	G S S (3)	1977	G (1)
1961	G (1)	1978	S (1)
1962	F G F (3)	1979	H O O (3)
1963	G O (2)	1980	A (1)
1964	O G A (3)	1981	H H (2)

注1) H:History and Tradition G:Group Work Theory
 F:The Field of Social Work S:The Setting of Practice
 A:The Art of Teaching R:Research
 O:その他
 注2) □は、『著作集』に所収されている文献を示す。

書かれており、なおかつその中に主要論文の多くが含まれている。さらに、シュワルツ理論の形成過程からみると、1960年から1963年の間が理論の骨格がほぼ完成する極めて重要な時期である。それはイリノイ大学時代とコロンビア大学時代にまたがっていることが分かる。この時期に形づくられたものを1960年代から1970年代にかけてのコロンビア大学時代に具体的かつ精神的に展開したといえよう。また、歴史的色彩が強い論文はコロンビア大学時代にはみられず、初期と晩年に片寄っているのも特徴的である。

4. シュワルツ論文のカテゴリー別概観と引用・参考文献の分析

『著作集』の分析には多角的な分析方法が求められる。ここでは2つの角度からシュワルツの論文を分析することにしたい。一つは、『著作集』の6つのカテゴリーごとに分析することであり、もう一つは引用・参考文献の集計による分析である。

1) シュワルツ論文のカテゴリー別概観

『著作集』では26編の論文が6つのカテゴリー(パート)に分類されている。以下、各カテゴリーごとの特性について概観することにする。なお、分析のための一方法として、シュワルツが脚注で引用及び参考文献として

あげた文献の著者について各カテゴリーごとに集計した結果も用いることにする¹³⁾。

第1の分類が「歴史と伝統」(History and Tradition)である。このカテゴリーには初期の論文1編と晩年の論文3編の計4編が収められている。時代的には両極に分かれているのが特徴的である。シュワルツは歴史的な観点も重視し、晩年には歴史的な視点からの著作を連続して発表している。シュワルツの最後の論文“The Group Work Tradition and Social Work Practice(1981)”は、シュワルツが著作集のタイトルとして考えていたくらいであるから思い入れは強い。また、シュワルツの最初の主要論文である“Group Work and the Social Scene(1959)”は、個人と社会のあり方について触れており、「媒介」を生み出す源泉ともいえる。表4でこのカテゴリーに収められた論文において2回以上の引用・参照のあった論文の著者を一覧にした。レイノルズ(Reynolds, B.)とコイル(Coyle, G.)が上位を占めているのは論文で直接取り上げているので当然であるが、ブルーノ(Bruno, F.)、ロビンソン(Robinson, V.)、トレッカー(Trecker, H.)、バートレット(Bartlett, H.)らのソーシャルワーク系の人物に加えて、パーソンズ(Parsons, T.)、クーリー(Cooly, C.)、デューイ(Dewey, J.)、キルパトリック(Kilpatrick, W.)、フロイト(Freud, S.)等の隣接学問の著名な研究者の名前が多く挙がっているのが特徴的である。

表4 引用・参考文献の著者 (Part1)

引用回数	著者
37	Reynolds, Bertha Capen
8	Schwartz, William
5	Coyle, Grace Longwell
4	Bruno, Frank J.
3	Baldwin, James Mark
3	Bowman, LeRoy E.
3	Boyd, Neva L.
3	Chambers, Clarke A.
3	Cohen, Nathan E.
3	Cooly, Charles Horton
3	Dewey, John
3	Freud, Sigmund
3	Hofstadter, Richard
2	Arian, Harold
2	Barnett, Canon
2	Bartlett, Harriet M.
2	Evans, Glendower
2	Follett, Mary Parker
2	Hartshorne, Hugh
2	Kilpatrick, William Heard
2	Parsons, Talcott
2	Robinson, Virginia P.
2	Sullivan, Dorothea F.
2	Trecker, Harleigh B.
2	Williamson, Margaretta

表5 引用・参考文献の著者 (Part2)

引用回数	著者
23	Schwartz, William
5	Frank, Lawrence K.
5	Kuhn, Thomas S.
4	Lippitt, Ronald, et al.
4	Millikan, Max F.
4	Parsons, Talcott
3	Altman, I., et al.
3	Bartlett, Harriet M.
3	Buber, Martin
3	Hare, A. Paul
3	Homans, George Caspar
3	Kropotkin, Peter Alekseevich
3	May, Rollo
3	Vinter, Robert D.
2	Allport, F. A.
2	Allport, Gordon W.
2	Bales, Robert F.
2	Boehm, Werner W.
2	Bonner, Hubert
2	Cartwright, Dorwin
2	Conant, James Bryant
2	Cooly, Charles Horton
2	Dewey, John
2	Eaton, Joseph W.
2	Grinker, Roy R.
2	Hearn, Gordon
2	Heider, Fritz
2	Kelman, Norman
2	Lasswell, Harold D.
2	Loeb, Martin B.
2	Mead, George Herbert
2	Merton, Robert K.
2	Moreno, Jacob L.
2	Riecken, Henry W.
2	Rogers, Carl R.
2	Sherif, Muzafer
2	Smith, Mildred B.
2	Wolins, Martin

第2のカテゴリーが「グループワーク理論」(Group Work Theory)である。このカテゴリーには、1961年から1964年までの各年に執筆された4編の論文と1971年と1976年の論文の計6編が所収されている。いずれもシュワルツ理論の中核となる極めて重要な論文である。具体的な「媒介モデル」の形成という視点からすれば、“The Social Worker in the Group(1961)”、“Toward a Strategy of Group Work Practice(1962)”、“On the Use of Groups in Social Work Practice(1971)”、“Between Client and System:The Mediating Function (1976)”の4編を主要論文としてあげることができる。とりわけ、The Social Worker in the Group(1961)は、シュワルツ自身が後に12回引用・参照しており、シュワルツにとっても重要な位置を占める著作であることが分かる。表5でこのカテゴリーに収められた論文において2回以上の引用・参照のあった論文の著者を一覧にした。理論化にあたってどの分野から影響を受けているかを考察する意味でも興味深い。社会学、社会心理学、実存思想、進歩主義教育、集団力学など極めて幅が広い。また相互扶助論のクロポトキン(Kropotkin, P.)の名前が挙

がっているのも極めて深い示唆を与えるものである。

第3のカテゴリーが「ソーシャルワークの分野」(The Field of Social Work)である。1960年代に発表された4編の論文と1973年の論文が所収されている。特に、1969年の“Private Troubles and Public Issues:One Social Work Job or Two?”は、シュワルツの代表作の一つである。さらに、このカテゴリーでは専門職団体の問題にも触れられている。このカテゴリーに収められた論文において2回以上の引用・参照のあった論文の著者を表6で示した。

表6 引用・参考文献の著者 (Part3)

引用回数	著者
10	Brager, George A.
10	Schwartz, William
6	Mills, C, Wright
6	Parsons, Talcott
6	Smith, Harvey L.
6	Wilensky, Harold L., et al.
5	Kuhn, Thomas S.
5	Lee, Porter R.
5	Richmond, Mary E.
4	Chambers, Clarke A.
4	Flexner, Abraham
4	Hutchins, Robert M.
4	May, Rollo
3	Buber, Martin
3	Burns, Eveline M.
3	Cloward Richard A., et al.
3	Follett, Mary Parker
3	Greenwood, Ernest
2	Baldwin, James Mark
2	Bartlett, Harriet M.
2	Carr-Saunders, A.M, et al.
2	Cogan, Morris L.
2	Cohen, Nathan E.
2	Coyle, Grace Longwell
2	Eisman, Martin
2	Grosser, Charles F.
2	Hendy, Charles E.
2	Kilpatrick, William Heard
2	Lindemann, Eduard C.
2	Lubove, Roy
2	Merton, Robert K.
2	Meyer, Henry J.
2	Polansky, Norman A.
2	Pray, Kenneth L.M.
2	Rein, Martin, et al.
2	Reynolds, Bertha Capen
2	Specht, Harry
2	Weiner, Hyman J.

第4のカテゴリーが「実践の場」(The Setting of Practice)である。1960年代と1970年代前半の著作が中心である。いずれもシュワルツの実践経験の影響を強く受けている。シュワルツの理論の一つの具体化の方法である。表7でこのカテゴリーに収められた論文において2回以上の引用・参照のあった論文の著者を一覧にしたが、件数は少ない。

第5のカテゴリーが「教育の技術」(The Art of Teaching)である。2編の論文が収められている。シュワルツの教育者としての側面も看過できない。表8でこのカテ

表7 引用・参考文献の著者 (Part4)

引用回数	著者
10	Schwartz, William
3	Carter, Woodrow W.
3	Dall, Adolin G.
2	Blumenthal, Luis H.
2	Dimock, Hedley S.
2	Gibson, H.W.
2	Goldsmith, Jerome M.

表8 引用・参考文献の著者 (Part5)

引用回数	著者
4	Bruner, Jerome S.
3	Bellack, A.A.
3	Dewey, John
3	Gage, N.L.
2	Barzun, J.
2	Bruffee, K.A.
2	Cantor, N.
2	Drosnin, M.
2	Flanders, N.
2	Hutchins, Robert M.
2	Lee, C.B.T.
2	Merton, Robert K.
2	Ripple, Lillian
2	Shulman, Lawrence
2	Tyler, Ralph W.

ゴリーに収められた論文において2回以上の引用・参照のあった論文の著者を一覧にした。

第6のカテゴリーが「調査」(Research)である。3本の論文が収まっている。近隣センターに関する2編の論文は極めて長文である。ここでもシュワルツの実践経験がもとになっている。表9でこのカテゴリーに収められた論文において4回以上の引用・参照のあった論文の著者を一覧にした。非常に引用・参照文献が多く、このカテゴリーにのみ登場する人物もかなり多いことが特徴的である。

2) 引用・参考文献の分析

『著作集』の"Collective Works"に所収されている26編の論文の中で、引用文献及び参考文献を記した脚注のある文献が20編あった。各カテゴリーで紹介してきたが、その脚注をすべてコンピュータに入力して処理し、その傾向を調べた¹²⁾。総数は1,285件、被引用著者は532名であった。この結果を分析することによって、シュワルツに影響を与えた人物や理論、思想の一端が明らかに

表9 引用・参考文献の著者 (Part6)

引用回数	著者
27	Schwartz, William
16	Holmes, Douglas
15	Vinter, Robert D.
13	Kraus, Richard
9	Lippitt, Ronald
9	Miller, Walter B.
8	Cloward Richard A.
8	Herman, Melvin
8	Short, James F., Jr.
7	Maas, Henry S.
7	Polansky, Norman A.
7	Rosenblatt, Aaron
7	Thomas, Edwin J.
6	Canter, Irving
6	Caplan, Nathan
6	Chein, Isidor
6	Meyer, Henry J., et al.
5	Alcabes, Abraham
5	Hillman, Arthur
5	Kaplan, Martin, et al.
5	Levin, Morris
5	Northen, Helen
5	Zald Mayer N.
4	Bernstein, Saul
4	Cantor, Marjorie
4	Carter, Genevieve W.
4	Ellsworth, Allen S.
4	Feldman Ronald A.
4	Gerfinkle, Max
4	Ikedo, Tsuguo
4	Lambert, Camille, Jr., et al.
4	Lazarwitz, Bernard
4	Macdonald, Mary E.
4	Schwartz, Gray, et al.
4	Shalinsky, William
4	Simon, Edwin
4	Sobey, Francine S.
4	Solomon, Theodore
4	Specht, Harry
4	Spergel, Irving
4	Walton, John
4	Wilson, Gertrude
4	Withey, S.B., et al.
4	Zimbalist, Sidney Eli

なるものと思われる。

表10で、全体で6回以上の引用・参照の対象となった人物をその回数の多い順に示した。表は左の列から、シュワルツが引用・参照した論文の著者、その著者の論文でシュワルツが引用した論文の発行年の幅、全体での引

用・参照回数、そして右端のカッコ内はシュワルツの論文の脚注にその著者が登場する論文数を示している。

その結果、シュワルツが自分の論文を引用・参照した回数が最も多く79回であった。その内訳をみると、1960年代の10年間に執筆した論文の引用・参照が56回で7割を越えているのが特徴的である。このことからシュワルツ自身にとってもこの時期の論文の重要性が高いことがうかがえる。また、執筆後引用・参照の期間が長い傾向もうかがえる。とりわけ、1961年に執筆した論文“The Social Worker in the Group”は、翌年の1962年から20年後の1981年に渡って引用・参照されている。

シュワルツが自分自身の文献を引用するというのは意味上も別格として、それ以外の著者に目を向けると、レイノルズ(Reynolds, B.)、ヴィンター(Vinter, R.)、がそれぞれ79回と42回を示しており突出して高くなっている。多くの人物の名前が挙がっているので、すべて指摘できないが、10回以上の引用・参照のある著者の中には、リピット(Lippitt, R.)、パーソンズ(Parsons, T.)、クーン(Kuhn, T.)ら隣接の学問領域の著名人たちの顔ぶれも並んでいる。さらに隣接の学問領域では、デューイ(Dewey, J.)、ブーバー(Buber, M.)、メイ(May, R.)、リンデマン(Lindemann, E.)、マートン(Merton, R.)、シェリフ(Sherif, M.)らも高い頻度で登場している。ソーシャルワーク系の人物では、コイル(Coyle, G.)、バートレット(Bartlett, H.)、リッチモンド(Richmond, M.)、ブルーノ(Bruno, F.)らの名前が上位に並んでいる。

また、シュワルツの論文の脚注にその著者が登場する論文数も意味のある数字である。この数字が多いほど、その著者や論文が広く影響を与えているともいえる。集計結果をみると、シュワルツの14編を除くとパーソンズの8編で最も多い。続いて、レイノルズ、リピット、デューイの3人が6編で続いている。

さらに、表には掲げてないが、5回以上の引用・参照のあった人物としては、リー(Lee, P.)、ノーザン(Northen, H.)、トレッカー(Trecker, H.)らのソーシャルワークの研究者に加えて、クーリー(Cooly, C.)、キルパトリック(Kilpatrick, W.)、レヴィン(Lewin, K.)らの著名な社会学者や教育学者も含まれている。

5. シュワルツ理論の5つの基本的視座

以上の『著作集』の分析を通して、シュワルツ理論を理解するための視座(perspective)を次の5つに設定し、今後の研究課題を中心に指摘することにしたい。これらの視座はシュワルツのソーシャルワーク理論を支えている理論的または思想的支柱でもある。

表10 引用・参考文献の著者（全体）

著者	引用論文 の発行年	引用回数 (論文数)
Schwartz, William	1948-1971	79 (14)
Reynolds, Bertha Capen	1932-1964	42 (6)
Vinter, Robert D.	1956-1966	20 (5)
Holmes, Douglas	1964-1969	16 (2)
Lippitt, Ronald	1940-1958	14 (6)
Kraus, Richard	1968	13 (1)
Parsons, Talcott	1937-1954	12 (8)
Cloward Richard A.	1955-1968	11 (3)
Brager, George A.	1960-1968	10 (2)
Kuhn, Thomas S.	1962	10 (2)
Dewey, John	1916-1960	9 (6)
Miller, Walter B.	1957-1959	9 (2)
Polansky, Norman A.	1949-1959	9 (2)
Bartlett, Harriet M.	1958-1962	8 (5)
Buber, Martin	1957-1958	8 (4)
Coyle, Grace Longwell	1930-1955	8 (4)
Herman, Melvin	1959-1966	8 (2)
May, Rollo	1958-1961	8 (3)
Meyer, Henry J.	1959-1965	8 (3)
Short, James F., Jr.	1962-1965	8 (2)
Chambers, Clarke A.	1962-1966	7 (3)
Frank, Lawrence K.	1957	7 (5)
Lindemann, Eduard C.	1920-1939	7 (4)
Maas, Henry S.	1950-1968	7 (2)
Richmond, Mary E.	1905-1930	7 (4)
Rosenblatt, Aaron	1966-1968	7 (1)
Thomas, Edwin J.	1955-1968	7 (2)
Baldwin, James Mark	1911	6 (5)
Barnett, Henrietta	1909-1919	6 (1)
Bruno, Frank J.	1957	6 (4)
Canter, Irving	1948-1967	6 (2)
Caplan, Nathan	1968	6 (1)
Chein, Isidor	1948-1950	6 (1)
Cohen, Nathan E.	1950-1958	6 (3)
Follett, Mary Parker	1926-1930	6 (3)
Hutchins, Robert M.	1936	6 (2)
Merton, Robert K.	1957-1961	6 (5)
Mills, C, Wright	1957-1959	6 (3)
Sherif, Muzafer	1936-1964	6 (4)
Smith, Harvey L.	1962	6 (1)
Specht, Harry	1963-1969	6 (3)
Wilensky, Harold L., et al.	1958	6 (4)
Wilson, Gertrude	1941-1956	6 (3)

注：カッコ内の数は、該当の論文をシュワルツが引用・参照して執筆した論文数である。

1) 歴史的視座

シュワルツの最初の主要論文(1959)と最後の論文(1981)とが極めて歴史的な色彩が強い論文であることは象徴的である。前述したように、1981年の「グループワーク

の伝統とソーシャルワーク実践」は、シュワルツ自身が著作集の表題として考えていた。シュワルツは歴史的観点からグループワークやソーシャルワークを捉えることの重要性を強く認識していた。それは、バーマン・ロッ

しもシュワルツ理論について、「彼が提示した新しい考えは、単体で出現したのではなく、むしろそれらを先導してきた時間の脈絡の中で、また以前からなされてきた努力を通して生まれた」¹³⁾と指摘している。シュワルツの理論は、シュワルツ一人によって理論化されたといえるが、それはシュワルツというフィルターを通した歴史的産物であるということができる。

歴史的観点を重要視するということは、現実から目をそらさずきっちりと向き合う中で理論化への視点を導き出すことを意味する。そうした歴史性という脈絡がどのような形でシュワルツ理論に注入され、理論として具現化されていったのかを洞察することはシュワルツ理論の理解につながるものである。特に、シュワルツが強調するグループワークの伝統とソーシャルワークとの関係を読み解くことは具体的な一つの方法となろう。

2) 社会的視座

シュワルツは個人と社会の関係は「共生的な相互依存関係」であると規定した。そして理想的なグループの状態を「相互援助システム」とした。筆者はこれらについてはこれまでの論文の中で掘り下げてきたが、その先にある「社会」というものをシュワルツはどのように捉えていたのか。民主主義社会としてのあり様が大きくシュワルツの中にあっただのではないかと思われる。

19世紀の後半以降の産業化は、多くの社会的問題を生み出したが、そこでシュワルツは対立や競争でなく、相互援助(mutual aid)や協力を強調した。パーマナーロッシは、「相互援助(mutual aid)」というテーマは、民主的なシステムそのものの原型としてソーシャル・グループワークのシュワルツの見方を統合することになった」¹⁴⁾と指摘している。ここに「媒介」を生み出す土壌があったのである。そうだとすれば、共生的な相互依存関係や相互援助システム、媒介と民主主義社会とがどのような整合性をもってかみ合うのか。これも重要で大きなテーマである。そして何度もシュワルツが引用しているデューイやキルパトリックらの進歩主義教育との関係、クロボトキンの思想との関係をも視野に入れて考察しなければならない。

3) 実存的視座

これはシュワルツ理論を理解する上では極めて重要なテーマである。ブーバーやメイの論文が多く引用されていることから分かるように、シュワルツの理論は実存思想から極めて大きな影響を受けている。それがどのようにシュワルツ理論の中に吸収され、具体的なワーカー

の援助行動として展開されているのかを明らかにする必要がある。シュワルツのいう「今、ここで」(here and now)の強調などは少なくともその一端を示すものである。

そしてソーシャルワーク理論の系譜の中では、機能主義学派の系譜との関係を明確にすることも求められる。タフトやロビンソンの引用もみられるが彼らの影響をどのような形で受けているのかについての考察が必要となる。このことは、ソーシャルワークの理論形成史においてシュワルツ理論の位置を明確にすることにもなる。

4) 科学的視座

シュワルツはその思想性や哲学性ばかりではなく、理論化に向けて隣接の諸科学からの科学的な知見を大量に吸収している。特に、レヴィンらを代表とする集団力学の研究成果を積極的に取り入れている。また、トライアングルモデルに顕著にみられるようにシステム論の影響極めて大きく、とりわけパーソンズの影響は大きい。これらの科学的視座からの検討も求められる。

5) 実践的視座

シュワルツにとって「実践」のもつ意味は多様で深い。第1には、シュワルツ自身によるコミュニティセンターや近隣センターにおける実践である。そこでシュワルツが感じ、学んだことは何だったのか、またグループワーク実践の可能性や魅力についてはどのように感じていたのかを探ることはシュワルツ理論の根源を垣間見ることになる。第2には、ソーシャルワーカーの機能のあり方に焦点を当てた実践である。シュワルツの専門職の機能に関する考え方は独自機能を導き出す前提となっている。第3には、シュワルツが力を入れていた教育者としての実践である。シュワルツのソーシャルワーク教育のあり方の中にソーシャルワークへの思想が反映しているように思える。

6. 今後の課題

筆者の最終的な目的は、シュワルツの理論を基礎的部分として発展させた「ソーシャルワークの媒介実践論」の構築にある。本稿における取り組みは、その基礎部分の研究にあたる。しかしながらシュワルツの『著作集』を俎上にのせて、分析の対象にするという仕事は非常に大きなエネルギーを必要とする。『著作集』の分析としてはまだまだ第一歩を踏み出したばかりである。今後も継続して研究対象としていきたい。脚注の分析においても、数量だけでなく質的な影響も含めて分析する必要が

ある。

本稿では、『著作集』の性格と意義を明らかにするとともに脚注の客観的分析を中心に分析を試みた。そしてその分析を通してシュワルツ理論の理解と考察のための5つの視座を提示した。今回はこの5つの視座を中心にシュワルツ理論の内容の分析と明確化に取り組むことにしたい。

注

- 1) Toby Berman-Rossi(ed.), *Social Work: The Collected Writings of William Schwartz*, F.E. Peacock Publishers, Inc., 1994. (1993年10月にニューヨーク市で開催されたAASWGの第15回年次大会において、本書の編者であるバーマン・ロッシによるワークショップ“The Relevance of William Schwartz’ Idea for Practice with Groups in Today’s Troubling Times.”の中で本書の出版報告があった)
- 2) ①岩間伸之「グループワークにおける相互援助システム—ウィリアム・シュワルツの遺産として—」『社会福祉学』第33巻第2号, 日本社会福祉学会, 1992, pp.137-162.
②岩間伸之「グループワークにおける『媒介』の思想—W. シュワルツの実存への思索—」『同志社社会福祉学』第7号, 同志社大学社会福祉学会, 1993, pp.62-73.
③岩間伸之「グループワークにおける援助過程研究—W. シュワルツによる媒介機能の展開—」『ソーシャルワーク研究』第20巻第3号, 相川書房, 1994, pp.44-49.
- 3) 岩間伸之「ソーシャルワークにおける媒介実践論研究—『媒介・過程モデル』の素描—」『社会福祉学』第37巻第2号, 日本社会福祉学会, 1996, pp.66-83.
- 4) Berman-Rossi(ed.), *op.cit.*, Preface.
- 5) *Ibid.*, preface, p.2, and pp.185-186 (Note and Reference).

- 6) William Schwartz, “Social Group Work: The Interactionist Approach”, *Encyclopedia of Social Work*, NASW, 1971 (16th), 1977 (17th).
- 7) William Schwartz and Serapio R. Zalba (eds.), *The Practice of Group Work*, Columbia University Press, 1971, pp.13-14. / 前田ケイ (監訳)・大利一雄・津金正司共訳『グループワークの実際』相川書房, 1978.
- 8) Alex Gitterman and Lawrence Shulman, in Berman-Rossi(ed.), *op.cit.*, Foreword.
- 9) *Ibid.*.
- 10) Charles D. Garvin, “Book Review”, *Social Work with Groups*, Vol.18, The Haworth Press, Inc., 1995, p.149.
- 11) 入力及び集計方法の詳細は、注の12)を参照のこと。
- 12) 論文の脚注に記載された引用文献及び参考文献のデータベースへの入力と集計は、次の内容で処理した。各パートごとの集計は全体の結果から抽出したものである。
①原則として、『著作集』の Collective Works に掲載された26の著作のうち脚注が付された20の文献を対象とし、その脚注に記載された引用・参考文献の作者とその発行年、シュワルツがそれを掲載して発刊した発行年、『著作集』の通し番号、を入力した。なお、一つの論文内において同一論文から複数回の引用がある場合もそれぞれを1としてカウントした。
②引用・参考文献のうち、NASW等の団体・組織から発行された報告書等は割愛した。したがって、個人名(連名を含む)による文献のみを対象とした。
③集計にあたっては、シングル名の論文と連名の論文のファーストネームの著者が同一の場合は、「同じ著者」として処理した。
- 13) Berman-Rossi(ed.), *op.cit.*, p.198.
- 14) *Ibid.*, p.199.

Summary

The purpose of this paper is to form of the basic perspectives for understanding by analyzing of *Social Work: The Collected Writings of William Schwartz* (1994). I have analyzed the references of all Schwartz’ papers in the collected Writings. It offers the key to an understanding of Schwartz’ theory. I arrive at the conclusion that the basic perspectives are 1) the historical perspective, 2) the social perspective, 3) the existential perspective, 4) the scientific perspective and 5) the practical perspective.